８．ＩＴ教材のブラッシュアップ

【ワーキンググループ３】

急性期病院における他職種連携チーム医療
および周術期口腔機能管理を学ぶ

WG3 プロダクト

の部分をクリックするとジャンプします











急性期病院における他職種連携チーム医療および周術期口腔機能管理を学ぶ。

グループ３　昭和大学　勝部直人

3 グループは、これから生じる 2025 年問題を学生に認識させるべく①後期高齢者②在宅（歯科）医療③慢性疾患④多剤服薬の４点を最重要なファクターとみなして討議した。

向井教授の用意した「日本の高齢化率の特徴」や「日本の年齢区分別将来人口推計」、「東京圏とその他の地域における高齢者人口増加量と増加率」のグラフなどの資料をもとに、2025 年には、後期高齢者の割合が 30%を超えること、人口にして 400 万人の増加が見込まれるものの病床数が増えることは期待できないので在宅で療養する後期高齢者が必然的に増加することを、学生に認識させる必要があることを確認した。

こうした人口動態の変化にともない、歯科医療へのニーズが変革することは明確であり、歯科医療サービスも在宅診療の充実へとパラダイムシフトすべきであると考えられる。後期高齢者の心身的特徴を良く理解したうえで、全人的な対応のできる歯科医師の育成が必要だと考えられた。

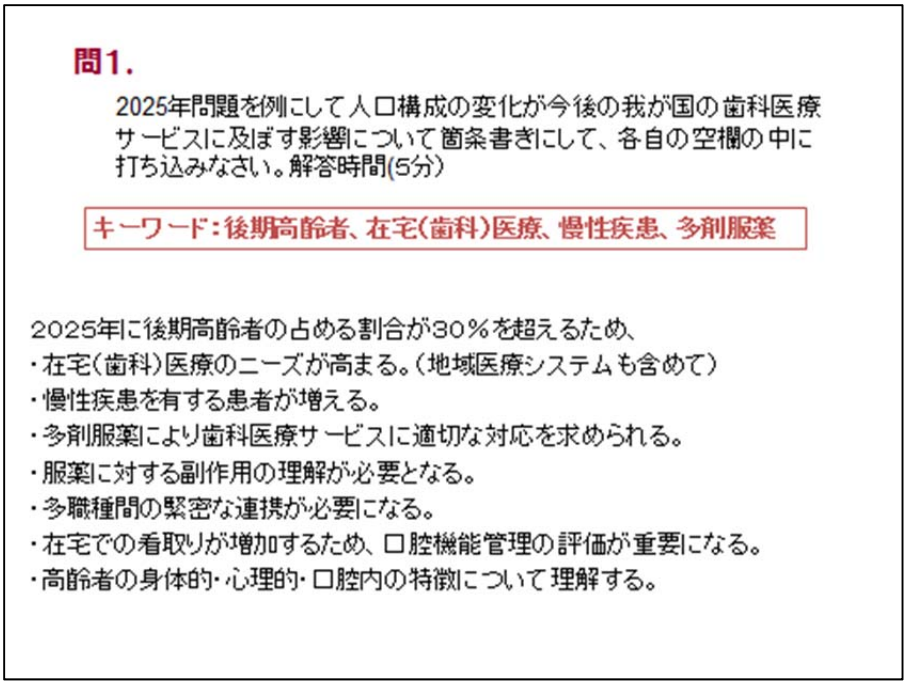
また、こうした問題は増加し続ける医療費の問題からもその必要性を認識できる。入院における後期高齢者の受診率は若人の 6.6 倍、日数も 1.4 倍、外来においても同様に受診率で 2.5 倍、受診日数で 1.3 倍であり、医療費を増大させている要因が後期高齢者にあることは明白である。将来的には入院と外来の両方から漏れてしまう患者が増えることが予想され、病院の入院医療・外来医療に変わる在宅医療の充実が求められ、患者の QOL の維持・向上に歯科医療サービスが参画できるもることを学生に教育する必要があると考えられた。

また、脳梗塞を発症し入院加療後のシナリオを作成し、患者入院中の患者さんに対し「感染予防」、「早期離床」、「廃用予防」の 3 点から口腔のケアであること、また、歯科医療関連職種は、急性期病院の、口腔ケアチーム、摂食・嚥下チーム、呼吸ケアチーム、栄養サポートチーム、感染対策チームに関与していることを学生に学習させることを確認した。口腔ケアによって誤嚥性肺炎が予防でき、嚥下障害の改善のためにも機能的な口腔ケアが重要であり、経口摂取に向けた機能訓練のため生活の自立の補助（歯ブラシ・スプーン等）について考察させることも討議された。

セッション１の報告「IT 教材のブラッシュアップ（地域連携医療)」

グループ３　昭和大学　弘中祥司

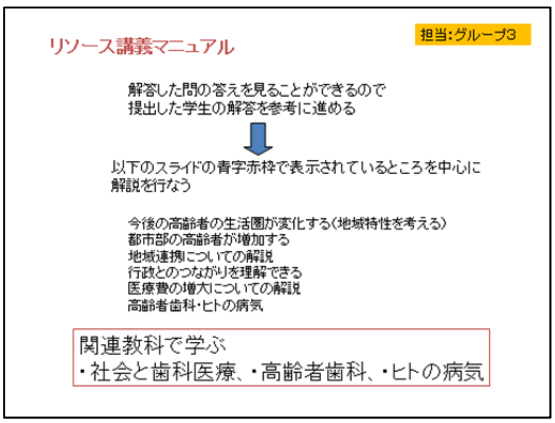
まず、これまでの IT 教材から必要な学習項目や問題を作成した。



これから生じる 2025 年問題を焦点として、キーワードの抽出を行い、

① 後期高齢者
② 在宅（歯科）医療
③ 慢性疾患
④ 多剤服薬

上記、４つが重要なファクターとして討議された。2025 年には、後期高齢者の割合が 30%を超えるため、キーワードを穴埋めする問題が必要と考えられた。



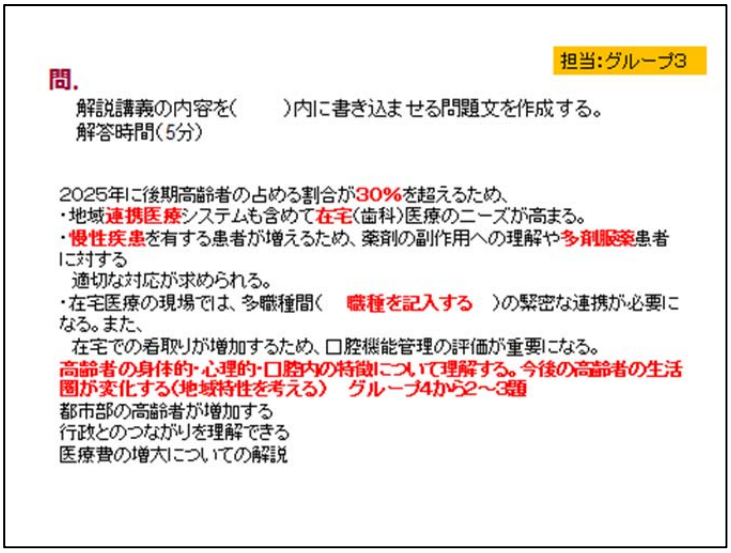
また、リソース講義に関しては、解答した問の答えを見ることができるため、提出した学生の解答を参考に進める。

特に今後の高齢者の生活圏が変化することを重視して、地域特性を考えるようにリソースを工夫する。

また、関連教科との連携も重視する。

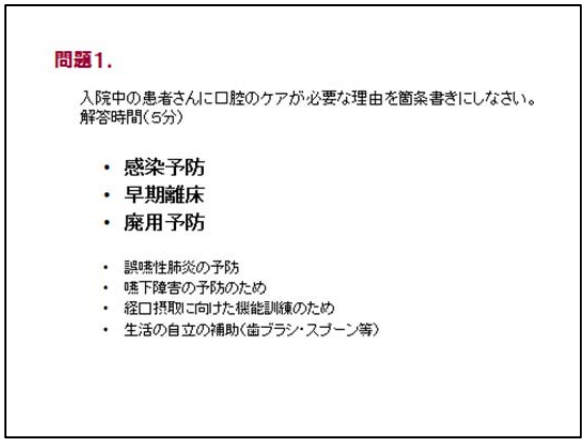
したがって、問には右図のように、2025 年問題を中心とした、在宅医療や多職種間連携をキーワードにした問題を課し、理解を深めてもらうようにする。

授業１（9 月 10 日分）は以上で、終了した。

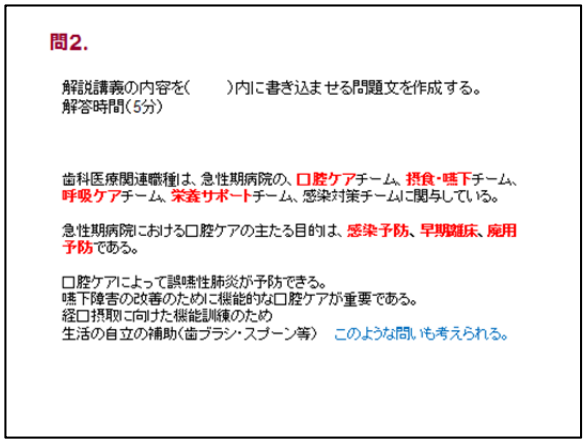


引き続いて、授業３（9 月 17 日分）について討議なされた。

入院中の患者さんに口腔のケアが必要な理由を問う問題で、右図の「感染予防」、「早期離床」、「廃用予防」の３つが特に重要と考えられた。それには、誤嚥性肺炎予防や生活の自立補助が必要であるため、その点に関する要点が押さえられるように、解説講義を工夫する必要があると考えられた。



そして、同様に問２では、歯科医療関連職種は、急性期病院の、口腔ケアチーム、摂食・嚥下チーム、呼吸ケアチーム、栄養サポートチーム、感染対策チームに関与している。急性期病院における口腔ケアの主たる目的は、感染予防、早期離床、廃用予防である。口腔ケアによって誤嚥性肺炎が予防できる。嚥下障害の改善のために機能的な口腔ケアが重要である。経口摂取に向けた機能訓練のため
生活の自立の補助（歯ブラシ・スプーン等）このような問いも考えられた。

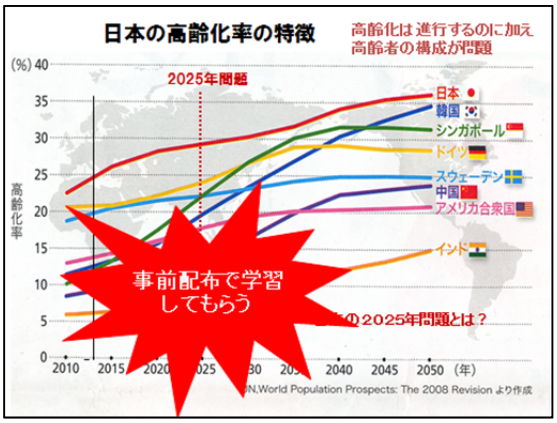


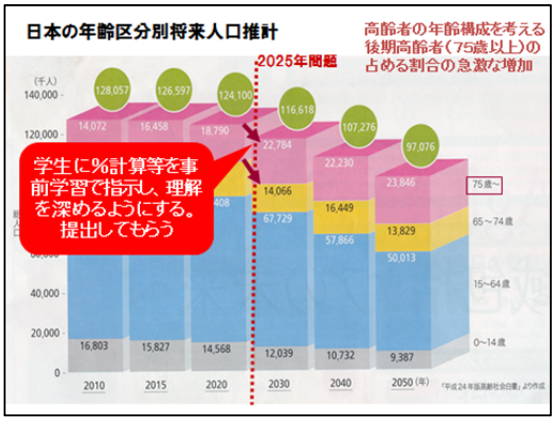
この時点で、セッション１の時間が終了し、討議がなされた。

セッション２の報告「IT 教材のブラッシュアップ（地域連携医療)」

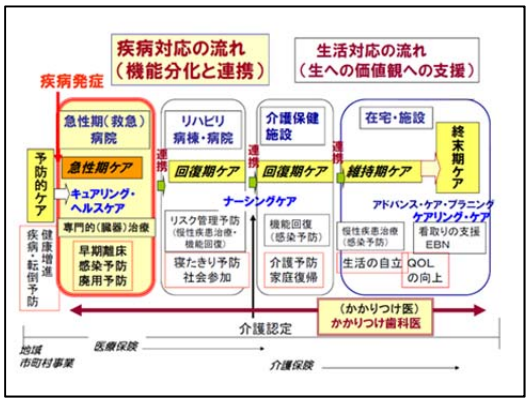
グループ３　昭和大学　弘中祥司

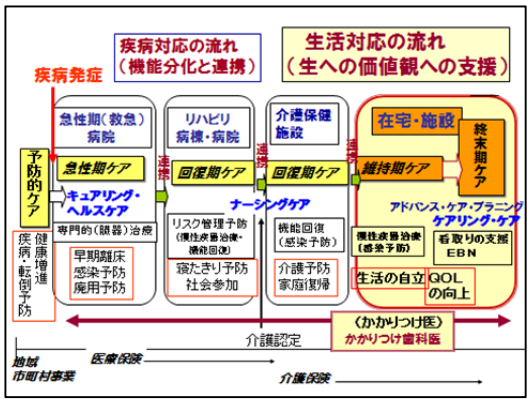
　セッション１の IT 教材から、全体の流れについて再度検討を行った。
特に日本の高齢化率の上昇、ならびに 2025 年問題については、e-learning 単体では、学習効果が低いと考えられたため、事前配布資料や学生に対する、あらかじめ後期高齢者の比率を%計算させることにより、理解を深めるように変更すると、グループでの一致をみた。





また、授業３と授業４が有機的に結合しやすくするため、患者の発症から、在宅までの対応の流れを、順次配置することにより、学生が理解をしやすいように流れを理解しやすいように配置しなおした。（下図左から右へ）





上述の点をふまえて、次の Power Point　資料を作成してセッション２を終了させた。